



山捷王全集

第二卷

講談社

木山捷平全集 第二卷

昭和五十三年十二月十五日 第一刷発行

定価 三八〇〇円

著者 木山捷平

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

編集 東京都文京区音羽二―二―二
電話東京03九四五―一―二(大代表)
振替東京八一三九三〇郵便番号二―二
株式会社第一出版センター

印刷 豊国印刷株式会社
製本 島田製本株式会社

© 木山をさる 昭和五十三年

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替え致します。

木山捷平全集 第二卷 目次

〈小説〉

河骨

猫柳

侏儒の友

山ぐみ

氏神さま

ねんねこ

帰国

幸福

春雨

立冬

枯木の花

空圍

九

三

六

八

七

一五

二三

一三

一四

一五

一六

一四

疎開者

一九九

玉川上水

二〇六

脳下垂体

二一九

春の奇蹟

二二〇

耳かき抄

二四三

柿のなり年

二五五

〈随筆〉

I

わが名作鑑賞

二六三

わが文学の故郷

二六六

井伏文学またぎ

二六九

将棋の相手

二六九

私と雨月会

二七一

Ⅱ

我家の庭

二七三

時代の差異

二七四

北京の借金

二七六

はじめての熱海

二七七

日記 昭和十五年～三十年

二八三

あとがき 木山みさを

二八五

題字 蓬萊利兼
装幀 アトリエ・セブン

木山捷平全集

第二卷

小

説

河骨

読者は小説のようだと言うかも知れない。けれどもこの世の中には小説のようなことが時には事実起ることもあるのである。

昭和十×年七月末の或る晩、門間兵三は妊娠九ヵ月の細君が郷里の実家へ行って身二つになりたいという希望で東京駅をたったのを見送つての帰途、バスで新宿に降りぶらぶら夜店をひやかしているうち、何気なく買つてしまつた二十日鼠の這い動いている金属製の小さな籠をぶら下げ、有名な映画館の前の四つ角でさてどうしたものかと考え、それからその広さに於ては新宿一だと言われている或る高級喫茶店にはいつて行つた。高級喫茶店と今私が言つたのは、コーヒーや紅茶が上等で料理や果物が上品であるという意ではなく、そこに働いている女給仕がべとべと飲食を強要したりチップを欲しがったりしない、つまり夫婦づ

れて入つても子供づれで入つても、亭主がうろたえないでもすむ店との謂である。ただし給仕女の十何人かは出来得る限り容姿をととのえて美しさを競っているから、お茶をのみながら、軽い食事をしながらひそかに眺める分には支障はない。この店は入口から二、三間^{さん}だらだと坂を下つて行く仕掛けになっている。つまり表の街路にくらべると二尺ばかり低く、言つて見れば七分の一階に三分の地階を加味した構造になっており、地上よりも冬は幾らか暖かく夏は涼しいという理屈である。この半地階の広間にだらだらと降りて行つた門間兵三は、坂を下りきつた所にある勘定台の前で支払いをすまそうとしている霜降の洋服を着た一人の青年にべこんとお辞儀をされた。浴衣に無帽の門間兵三は常日頃の習慣で「や」と頷をぐいと引くだけの簡単な答礼をかえしながら学生の顔をながめると、それは彼が勤務している府立第×中学でこの三月まで物理化学を教えていた安藤一男という、今は地方の高等学校にいる生徒であつた。「やあ暫く、何処だったかな、君は。水戸、いや、静岡？」と咄嗟には思い出せず、安藤一男の手に握っている制帽の徽章をのぞくようにすると、「新潟です」と生徒は半ば自信ありげに半ば不服そうに答えた。若い青年の自負心を少しでも傷つけたことに気づいた彼は「あ、そうだった、新潟だ、新潟はどうだい？」と言つて見たが、相手

がちよつと返事に困った様子に場所柄思いつくまま、「コーヒーはうまい？」とたずねた。ところが安藤一男はますますうまい答えが見つからぬらしく、中学の授業時間にしたと同じような所作で後頭部に手を持って行き、口をゆがめてちらりと門間兵三の顔をぬすみ見た。何もそんなに卒業した生徒が在学当時の真似をしなくてもいいのであるが、門間兵三は暑中休暇で忘れていた自分の職業地位を意識し、「いや、コーヒーなんかより、冷たいビールでも一杯のもう、さ」と先に立つて歩き出すと、安藤一男は「いえ、あの、僕は、あの、失礼します、あの」ともう一度お辞儀をして周章^{しうしやう}でたらだら坂を上って行つた。何がなし振られた思いに、門間兵三は広間の真中どころの卓に腰をおろすと、ではひとりで飲んでやれ、と心に命じた。

ところで私は今高等学校生安藤一男のことを書いたが、この生徒はこの小説に何等関係はないのである。もうこれきり現われないであろう。ただこの生徒は門間兵三のこの夜の飲酒の切掛^{きかけ}をつくつたまでのことである。そんなことを何でこの年少の生徒があずかり知ろう。門間兵三は二十日鼠の籠を卓の上におき、二匹の鼠がかわるがわる釣車を廻すのを眺めながら、一人でビールを飲み始めた。一本、二本、——軽快なレコードの音楽の中で、夏の夕べの一時

を思い思いの思いで過している客達の談笑の中で、門間兵三は一人でいることが段々楽しくなつて来た。月給が少ない癖に酒を飲みすぎるのだの、煙草の量が多すぎるのだの、一帳羅の着物に又穴をあかしたのだの、毎日何か愚痴を言わないうでは日の送れぬ細君と、尤もその結果は一つ二つ頼べたをなぐられるのが落ちではあるが、その細君と別居して今夜は何年振りかで広い蚊帳の中で高軒がかけるのかと思うと、周囲の卓で何やらがやがや喋り合う他人の雑音も、山の中で松籟をきいているように、聞いている本人はかえつて幽遠の中にいる心地で、突飛にも中学時代に習つた、君子和而不^レ同、小人同而不^レ和という句さえ思い出し、ビールの液が腹にたまるにつれ、アルキメデスの原理の如く、(風呂へ入るとすつと身体が軽くなる原理を諸君は御承知であらう)浮き浮きといい気持になつていた。で、門間兵三はたのし気な顔を斜めに振つて第五本目のビールを給仕女に命じたのである。

と、その時、卵色のワンビイスを上手^{じょうず}に着こなした一人の女が、彼の卓と隣の卓との間の狭い通路を足早やにとおりかかった。女は門間兵三の傍をとおり時、ちらりと二十日鼠に眼をおとしたようであつたが、右手に持った旅行用鞆の重みとどちらかと言えば瘦形の体を左にくねらしたまま広間の一隅にある TOILET の中に消えて行つた。間も

なく中から出て来たその女は、断髪の方々した毛を首の動作でひょいと揺り動かすと同時に、ちらりと二十日鼠の方に視線を注いだ。と思う間もなく、次の瞬間決心を眉の間に引きよせ、先刻の通路を逆に門間兵三の卓に近づいて来た。

「あの、もし」と女は言った。その声はちよつと鼻風邪をひいたような声であつた。ああ、神様は何という悪戯いたづらがお好きな方であろう。美貌というほどではなくとも、ちゃんとしたのつた眼鼻立ち（その眼は日本人としては少々青みが深すぎるという者もあろうが）きめのこまかい膚の色合、黒い豊かな髪、それは誰が見ても十人並以上と評価するに違いないのであるが、その声は鼻風邪を引いたようにかすれていた。いくら小説であつても、今それをここで訂正する訳にはいかない。だから読者諸君も彼女が今後物を言う場合には、鼻風邪をひいた時の声を想像して貰いたい。尤も慣れてしまえば余り気にならなくなるものではある。が女はつづけた。

「失礼でございますが、あなたは、門間さんではございませんでしょうか？」

「は！」と無心に釣車を廻す二十日鼠をながめていた門間兵三は、椅子に腰掛けたまま、けげんな眼差で女をふり仰いだ。

「お分りになりませんか？」女は自信をもつて言った。「わたし、チノ、タエです」

「しばらく」と普通誰もが言う挨拶をして、門間兵三は後の言葉にゆきつまつた。ゆきつまつた言葉の裏で、突如としてあらわれたこの女と自分との関係について、出来るだけ敏捷にしかも出来るだけ冷静に記憶の糸を廻転さすことにとめた。が、やはり彼は周章しうしやうでいた。けれどもこういう場合、女性を前においてどじを踏むとは男子の沽券にかかわることだ、と思つた門間兵三は相当地位もあり名誉もある男子のように、

「ま、お掛けなさい」と言つて、すぐ近くにゐる女給仕を振返り、

「君、君、コップを一つ！」と甲高い調子で命じた。そんなに、甲高い声を出す積りではなかつたが、そして彼は平常から男性的な重味のある声を出すことに努力しているのであるが、少し周章しうしやうでた時には地声があらわれるのである。それが背の丈五尺一寸輻重兵特務兵第二補充兵の彼の頭のでつぺんから出る時は、一種異様な趣を呈するのである。思わずふき出しそうになつた女給仕は素早く口を掌でおさえて料理窓の方へ走り去つた。が、そんなことは露知らぬ門間兵三は手持無沙汰に二十日鼠の籠を卓の下に棚にゆつくりとしまつて見た。が、それでも時間が余りすぎた

ので、

「いかがです、一杯！」

と新しいコップの来るのを待ちかねて、女の前に自分のコップを差出した。そして小麦色の麦酒をこぶこぶとコップに注ぎながら、その間にようやく、この女——茅野多枝と自分とは他人に見られたところで、何のやましきもない間柄であると思ひに決めた。そこで門間兵三は、

「よく分つたですね、僕が？」

と、はじめて多枝の顔を見つめた。多枝はすでに門間兵三の真向いの椅子に腰をおろしていた。

「……………」

彼女は黙つてうなずき、門間兵三の顔を眺めた。門間兵三はその瞬間、口のほとりにちらりと微笑を湛えようとしたが、すぐに中止した。なんとすれば茅野多枝の眼は日本人として少し青すぎるのは生れつきで仕方がないとしても、その瞳の光は冬の湖のように冷たかった。門間兵三はそう感じた。ところが次の瞬間、そんな門間兵三などに頓着なく茅野多枝はちらりと目に微笑をたたえて、

「いただきますわ」とコップに手を持って行つた。その微笑はもう一度譬えれば冬の湖のひと所に、ちらりと太陽が光を落したように思えた。そう思った門間兵三の目の前で、彼女はコップの麦酒を一気に半分ばかり飲みほした。

門間兵三は半ば安心してこれを勝負で言つて見れば、彼は彼女に突然声をかけられてからその時まで、相手に敗けた形であつたが、ようやく一対一の氣持になれて来た。と、いつとき折角の酔いも引いてしまひさうになつていた酔いが、元通りもどつて来るのが感じられた。彼の同僚の英語教師の細君は、一時水商売に關係していたこともあつて亭主同様酒のいける女であるが、そして彼は度々三人で酒を飲んだことがあるが、彼はその細君を思ひおこしたのである。

「だって！」と、その時茅野多枝が言つた。

「しかし、不思議だなあ！」と、門間兵三は感嘆した。

「不思議かしら！　だつて門間さん、ちつとも変らないのねえ！」女はコップの残りの麦酒をきゅつと咽喉にそいだ。

「そうかしら」

「わたし、門間さんが此処へはいつていらした時、すぐ分つたわ。こういう風に煙草をくわえて、それから、何となくきょとんとして……あら、ご免なさいね、わたしすぐに本當のこと言っちゃつて！」

「いや」と門間兵三は答えて、横の方を向いてひとりであつた。彼は中学で生徒から『きょとん』という渾名をつけられていたのである。そんなことを何で彼女が知ろう。

で、彼女は門間兵三の横顔を眺めながら、故知らぬ可笑しさがこみあげ、誰もいなければ彼の首玉をくすぐってやりたいいたずら心をさえ感じたのである。

さて私は此の辺で門間兵三と茅野多枝とのそもそもの間柄について面倒くさくはあるが述べておく必要がありそうだ。いさか陳腐にわたるかも知れぬけれど、読者諸君も辛抱して貰いたい。辛抱ということはこの世の中では大切な美德である。さてずっと以前——と言っても十年ばかり前、門間兵三は山陰松江にある高等学校の理科一年生であった時、初めて学期試験がすんで暑中休暇が来て、播州加古川の実家へ帰省の途次、同じく山陰に在る山間の或る小さな町を訪ねたことがある。その小さな町には彼と同じ年の同じ日に高等学校に入學し、奇しくも同じ寄宿舎の同じ室に同居することになった佐々山喜兵衛が、僅か二ヵ月の在學の後、胸部に原因不明の病氣を發して帰郷静養してゐた。その瘦身白皙の佐々山喜兵衛を見舞いかたがた訪ねて行つたのである。一つには、白線の帽子を阿弥陀に被り、^{ほろほ}朴齒の下駄を引つ掛け、腰に手拭をふら下げて、帰省の途中友人の家に立寄るなどという行為は、青年客氣の矜^こりを満足さすに十分であつたが、だから彼は山陰本線某駅でわざわざ途中下車し、それから数里の山道をがたがたの乗合

馬車に揺られながら、風に晒されたような小さな町を尋ねて行つたのであつた。それはたしか七月の十何日の午後七時頃であつた。馬車がようやく町の入口近くまで来ると、道のほとりの松の木を背にして、瘦身白皙の如何にも文科生らしい佐々山喜兵衛が竹のステッキを振り振り待っている姿が目にとまつた。彼は馭者が「あぶない……」と制止する聲を發した時には、最早や路上にひらり跳びおりていた。「やあ」「いよう」「試験はどうだった？」と先ず佐々山喜兵衛がたずねた。「あかん！ あかん！」と門間兵三は答えた。そして二人は並んで歩きながら学校の友人達の消息を次から次へ語り始めた。だから門間兵三は佐々山喜兵衛に病氣見舞いらしい言葉を述べることは、余程後刻になるまで失念していた訳である。

「お酒はどうします？」

二人が風呂から上つて、佐々山家の川に面した部屋の出窓によりかかつて、夕風を胸にいれていると、喜兵衛の母親が後ろから声を掛けた。母親は喜兵衛によく似て、瘦形で色白の、まだ四十そこその婦人であつた。

「つけて下さい」と喜兵衛が返事をした。

「ビールの方がよくはない？」と婦人は二人を等分にながめた。

「いや、門間の奴に一つうちの酒を飲ましてやりましょ

う」と喜兵衛が言った。その言葉の調子は年齢の割におとなびていた。彼の家はこの町の旧家で、相当名のひびいた造り酒屋であつた。

「よし、我輩が味をきいてやる！ どうせ元をただせばこの川の水やろ！」と兵三は叫んで川を指さした。ほ、ほ、ほ、と婦人は上品に笑いながら消えて行つた。

やがて朱塗の膳に夕餉の支度がはこぼれて、では私がお酌をさせて頂きます、と坐つた婦人を二人は無理に撃退した。兵三はすばりと猿股一つになり、豪放な態度をつくつて杯をあおりながら、

「この魚は何や？」と喜兵衛に尋ねた。

「これか、これは鮎だ、この川からとれる名産だ」

「これが鮎か、なるほど、それにしては案外うまいね」

「それにしても、案外君は不粋だね」

「ぶすい？」

「うん、つまり、無智だというんだ」喜兵衛は柔和な微笑を白い顔に浮べた。

「何だと！」兵三は持前の甲高い声をあげて応じた。

「じゃ、君はこの酒の分解式を知つとるか、知つとれば言うて見い」

こういう風な調子で二人の酒宴は始まつたのである。しかし、やがて、喜兵衛の母親がいそいそと銚子のお代りを

持つて再び入つて来た。が、その時第一本目の銚子にはまだ半分の酒が残つていた。それであるのに、門間兵三の裸はもはや茹蛸のように赤く染まつていた。

「いかがですかしら、お味は？」と婦人は見て見ぬ振りをして兵三に新しい銚子をささげた。

「駄目です、小母さん、駄目です、佐々山の奴がちつとも飲まんで、僕まで飲めへんです」と兵三は手を振つて周章^{ちやう}てた。

「でも、もうお一つだけ、……門間さんはお父さんやお母さんお達者ですの？」と婦人はやわらかに席をとりもつた。

「親父もおふくろも疾うの昔に死んだです、家には兄貴と兄貴の嬢と、その子供が三人おるです」

「あら、そうですの！」母親はこころもち眉をひそめた。

「兄貴は小間物屋をやつとるですが、なんぼにもけちです、それで僕も来年あたりから苦学せんらんか知れんです。おい、佐々山、俺は苦学だ、苦学だぞ」兵三は新聞配達を真似て頓狂におどけた。その様子を眺めながら、婦人は胸をかかえて笑つた。徴兵検査前の兵三に、病気の息子を持つ母親のさびしい心境など分るう筈はないのであつた。

「折角遠方をお出かけ下さつたのに、何にもお見せする所